

入選

いつまでもライバル

長野県 川中島小学校 6年 高橋 一愛

「やったー。優勝したぞ。お父さん喜ぶぞ。」

ぼくは今、将棋に熱中しています。朝の5時30分に起きて、一番にすることは、テレビに録画した将棋の番組を見て、将棋ばんと駒を使って練習することです。

ぼくは、集中して考えることが苦手でした。自分に自信を持てることもありませんでした。勉強も運動も苦手でした。そんなぼくが変われたのは、T君のおかげです。3年生のとき、T君と同じクラスになりました。最初は話すこともありませんでした。ぼくは転校したばかりで、友だちがいなくていつもさびしい気持ちでした。その日もぼくは、放課後の児童プラザで一人で本を読んでいた。

そのとき、「いっしょに将棋やろう」とぼくを将棋にさそってくれました。そのときのぼくは、まだ駒の動きがやっとわかるくらいでした。ぼくは、「いいよ。やろう」と言ったけれど、本当は（大丈夫かな。本当にできるかな。）と、きん張っていました。T君は、まだ上手なさし方を知らないぼくに、

「こういうときは、こうしてせめるんだよ。」

と、駒を動かしながら説明してくれたり、攻撃されたときの守り方も説明してくれました。ぼくは、（やさしくて、親切だ。）と思いました。（これなら友だちになれるかもしれない……。）という気持ちになりました。それからぼくたちは、月に二度の地域の将棋教室で、たくさん対局しました。T君は強くて、何度も挑戦したけれど、ぼくは歯が立ちませんでした。それでも、T君は

「もう一回やろう。」

と言ってくれたり、

「もしこういうときは、こうさすんだよ。」

と教えたりしてくれました。ぼくは、T君が教えてくれたとおりにさすように意識しました。自分でも研究するようにしました。そうしたら、一年ぐらいうぎた4年生の3学期くらいから、だんだんT君以外の人に勝てるようになりました。

そして、5年生の2学期のことです。将棋大会の日にはぼくは、T君と対局することになりました。長い勝負になりました。（絶対に勝ちたい。）と思って、いつもより長く考えてさしました。その日、初めてT君に勝ちました。（自分は強くなったんだなあ。これもT君のおかげだな。）と感じました。

T君は何も言わずに、落ち込んでいました。ぼくは、何も声をかけてあげられませんでした。心の中では（ありがとう。）と思っていました。

次の将棋教室の日、ぼくは自分から「やろう」とさそいました。T君は「いいよ」と明るく言ってくれました。それからぼくたちは、50回くらい対局しています。勝ったり負けたりをくり返しています。ぼくは誰よりもT君と戦うのが楽しいです。T君はどう思っているのかわかりません。

今はぼくにとって、何よりも将棋が一番になっています。教えてくれたT君のために、ぼくはずっとT君のライバルでいたいです。